

女子大学学生寮における寮室と共用空間の構成

鈴木杏理*・元岡展久*・桂瑠以**

お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科*・学生支援センター**

Comparative study on common space of women's university student dormitory in Tokyo

Anri SUZUKI*, Nobuhisa MOTOOKA*, and Rui KATSURA**

Ochanomizu University, Graduate School of Humanities and Sciences*, Student Support Center**

Typically, a Japanese university student dormitory, recently constructed, provides individual rooms with toilet and bath. On the contrary, to develop the social skills of students, multiple occupancy rooms and common spaces are being more appreciated. Considering this, Ochadai SCC, a new type of dormitory was constructed in 2011 as part of Ochanomizu University. This dormitory was designed under the concept of "live together and grow together", valuing interpersonal connections between students. With this background, in this research, we compare the dormitory buildings of women's university in Tokyo, including Ochadai SCC, to specify the characteristic arrangement of private space and common space. Through the comparison, we categorize these dormitories according to the architectural composition of common spaces. We also indicate the particularity of Ochadai SCC, which consists in the arrangement of small community space and common lounge.

keywords : student dormitory, common space, community life, architectural planning, women's university

はじめに

大学の学生寮に求められるものは、時代背景や教育の考え方とともに、変化していく。近年、日本の大学に建設される学生寮は、個人部屋を基本とした個室寮が多く、生活費支援や厚生施設としての意味合いが強い¹。一方、今日人間関係の希薄化が社会問題として指摘されていることを鑑みると、寮には人格形成の場所としての教育的役割がもとめられている。大学の学生寮とは、学生たちが個性を活かしながらも、共同生活を通じて豊かな人間関係を形成することのできる場所ではないだろうか。そのためには、建築空間の整備と教育活動の支援という、ハードとソフトの充実が必要となる。通常、建築計画において学生寮の設計では、施設を構成する寮室と共用空間の相互関係が主要なポイントとされている²。こうした背景をふまえ、本論では、学生寮における共有空間について、女子大学における学生寮を比較し、寮室の種類（個室、共同部屋）による分類、ならびに共有空間の面積割合について検討を加える。

2011年3月、お茶の水女子大学に新しい学生寮、お茶大 Students Community Commons（「お茶大

SCC」）が建設された。現在このお茶大 SCC を含め、お茶の水女子大学には3つの学生寮が存在する。他の2つの寮は、小石川寮、国際学生宿舎（通称「大山寮」）であり、それらの概要は、すでに赤坂瑠以（2010）の報告に記載されているので本論では割愛する。新しく建設されたお茶大 SCC は、10個のユニットで構成されていて、各ユニットに5人で共同生活をするという構成の寮である。各ユニットには個室の他に、共用のキッチン、浴室、トイレ、リビングが設けられる。

お茶大 SCC のように、ユニットごとに数人のメンバーが共同生活を営むという形式の学生寮を「ルームシェア型寮」とすると、お茶の水女子大学の他の寮を含め一般に多い個人部屋を基本とした学生寮は、「個室型寮」である。さらに、かつての大学寮に多く見られた、一部屋に複数人で生活する形式の寮を「共同部屋型寮」と呼ぶこととしよう。そこで本論では、お茶大 SCC を含め、本学の既存学生寮、都内の女子大学の学生寮など計14棟の事例を収集し、平面図から寮における共用空間の比較分析をおこなう。ルームシェア型、個室型、共同部屋型といったそれぞれの形式の違いを念頭に置きながら、寮生が生活空間として利用できる場所の面積割合を比較検討する。

新しいタイプの ルームシェア型学生寮 「お茶大SCC」



ハウスを構成するABC

- A : Amenity Facilities
- B : Bedroom Space
- C : Communicate Living

「ハウス」とは、プライバシーを守った個室を確保しつつ、キッチンや浴室は複数の学生で共有する、ルームシェア型住戸のことです。この「お茶大SCC」では、5人組でハウスで生活します。

今まで知らなかった者同士が知り合い、助け合い、ともに生活する中で、それぞれが自分探しをして、自己実現を目指すことができる環境です。この学生寮には、5人の学生がすむハウスが、10戸あります。また、1階には、寮生が共同で利用できる共用リビングがもうけられています。

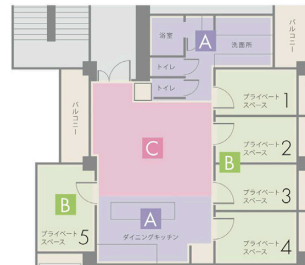


Figure 1 お茶大 SCC の概要図（左上：配置図、左：全体アイソメトリック図、右：ハウスの平面模式図

分析に先立ち、お茶大 SCC の計画上の意図（コンセプト）を簡単に述べておく。お茶大 SCC は、人と人とのつながりを重視した新しいタイプの学生寮である。寮生同士が互いに助け合い、協調し合い、ともに成長していく場所として計画されている。共にすまうことで、社会性を培い自立性と協調性を持った人格を育むよう考えられた。この「共にすまい共に成長する」ための場所を具体的な建築空間に翻案した計画が、お茶大 SCC における特徴的な共用空間の構成である。

お茶大 SCC は、5 人で共同生活をする小さなコミュニティが 10 個（収容人数 50 名）設けられている。この各コミュニティを「ハウス」と呼び、同じハウスで生活を共にするメンバーを「ハウスメンバー」と呼ぶ。各ハウス内には、プライベートな空間となる寮室のほか、ハウスメンバーが共同で利用するキッチン、トイレ、浴室などの水回りや居間（ハウスリビング）が設けられている。さらに寮には、各ハウスの他に、寮生全員で使用する共用ラウンジが設けられ、ハウスメンバー以外の寮生との交流の場、学生支援プログラムの場として使用されている。

個人で使用する寮室、5 人のメンバーで共用するハウス、寮生全員で共用するラウンジ、といったように使用する人数によって空間や設備に階層を持たせた設計がお茶大 SCC の建築計画上の特徴である。この建築計画上の工夫によって、お茶大 SCC では、一般的な個室型寮よりも空間が有効に活用されうること、つまり寮生 1 人あたりの利用可能面積が大きくなること

を示す。さらに共同部屋型寮よりも個人の空間が充実しており、個室型寮よりも寮生同士の交流の場が充実しているということも、指摘したい。このことで寮の



Figure 2 お茶大 SCC、外観写真



Figure 3 お茶大 SCC、ハウス内ハウスリビング写真



Figure 4 お茶大 SCC、1 階共用ラウンジ写真

有効活用をはかるとともに、寮生同士のコミュニケーションの活性化という計画意図を、建築空間の充実という点から実現し、教育的役割を考えた寮の共用空間のあり方を示す。

分析対象とする学生寮

本論では、東京都の女子大学の学生寮建築物を対象とし、各室の面積構成を比較する。お茶の水女子大学は、都心に位置する女子大である。類似した立地条件の寮と比較をおこなうため、対象を東京都の女子大学に限定した。東京に位置する 7 女子大学の学生寮 11 寮に加え、本学の 3 つの学生寮、計 14 棟を分析対象とする。これらの寮のうちお茶の水女子大学の寮をそれぞれ「SCC」、「小石川寮」、「大山寮」と記し、それ以外の 11 寮は、a～k の記号で記す³。調査項目を

次に示す。

- 基本的な建物のデータ（延床面積、収容人数など）
- 使用者（寮生が学部生であるか大学院生であるか）
- 寮室のタイプ「個室型」「共同部屋型」「ルームシェア型」ならびに寮室の面積、寮室定員人数
- 共用空間（共同キッチン、談話室等の有無）
- 共用空間の使用者、使用状況

建築図面ならびに上記の項目の情報を収集した。図面等は各大学のホームページのみならず、学生課、施設課を通じて資料収集おこなった。収集した資料から、共用空間や寮室の面積を算出し、一覧としたものが Table 1 である。

寮室と共用空間を評価する面積指標からみた寮の特徴

寮室ならびに共用空間の面積割合

まず、対象とした寮の面積構成を比較するため、寮の平面図をもとに、寮室、機能が限定された共用空間、機能が限定されない共用空間の、それぞれの面積と割合を算出した⁴。Table 2 にこれを示す。この割合を寮ごとにしめたものが Figure 5 である。個室型寮（小石川寮、a 寮、b 寮、c 寮、d 寮）と共同部屋型寮（f 寮、g 寮、h 寮、i 寮、j 寮、k 寮）では、その割合の傾向に大きな差は見られない。70%前後が寮室として使用されている。一方、SCC は他の寮に比べ寮室面積の割合が小さいのは明らかである。逆に SCC において大きいのは、機能を限定しない共用空間の割合である。ハウスリビングや学生全員で利用する共用ラ

Table 1 分析対象の寮の各種面積データ

| 寮名 | 寮室のタイプ | 延床面積 ㎡ | 収容人数 人 | 一人あたり延床面積 ㎡/人 | 寮室数 室 | 主な寮室の面積* ㎡ | 寮室人数 人 | 居室の合計面積 ㎡ | 寮室の1人あたり面積(A) ㎡/人 | 共用空間の1人あたり面積(B) ㎡/人 | 1人あたりの占有面積(A+B) ㎡/人 | 個人の使用可能面積(C) ㎡ | 個人の使用可能面積率(D) | 備考 |
|------|---------|-----------|-----------|------------------|----------|---------------|-----------|--------------|----------------------|------------------------|------------------------|-------------------|---------------|---|
| SCC | ルームシェア型 | 1261 | 50 | 25.2 | 50 | 7.0 | 1 | 382.4 | 7.6 | 13.2 | 20.8 | 217.8 | 17.3% | 9.5㎡が10室、7.0～7.6㎡が40室 |
| 小石川寮 | 個室型 | 1415 | 80 | 17.7 | 80 | 9.5 | 1 | 764.0 | 9.5 | 3.6 | 13.1 | 121.6 | 8.6% | |
| 大山寮 | 複合型 | 9116 | 399 | 22.8 | 331 | 12.5 | 1 | 4942.0 | 12.5 | 4.3 | 16.8 | 1083.9 | 11.9% | 寮室内トイレ、洗面付個室と共同部屋の「複合型」 |
| a寮 | 個室型 | 2302 | 82 | 28.1 | 82 | 12.2 | 1 | 1008.0 | 12.3 | 3.4 | 15.7 | 271.4 | 11.8% | 寮室内バス、トイレ付 |
| b寮 | 個室型 | 2307 | 99 | 23.3 | 99 | 7.1 | 1 | 701.6 | 7.1 | 4.6 | 11.7 | 329.8 | 14.3% | |
| c寮 | 個室型 | 1498 | 93 | 16.1 | 93 | 6.6 | 1 | 613.8 | 6.6 | 4.3 | 10.9 | 277.0 | 18.5% | |
| d寮 | 個室型 | 2281 | 54 | 42.2 | 54 | 14.1 | 1 | 763.0 | 14.1 | 9.9 | 24.0 | 386.9 | 17.0% | |
| e寮 | 複合型 | 1571 | 81 | 19.4 | 39 | 8.3 | 1 | 612.0 | 7.6 | 4.2 | 11.7 | 271.5 | 17.3% | 個室と共同部屋の「複合型」 |
| f寮 | 共同部屋型 | 5367 | 300 | 17.9 | 150 | 15.0 | 2 | 2250.0 | 7.5 | 2.9 | 10.4 | 559.0 | 10.4% | |
| g寮 | 共同部屋型 | 1988 | 116 | 17.1 | 58 | 12.0 | 2 | 697.2 | 6.0 | 3.5 | 9.5 | 328.9 | 16.5% | |
| h寮 | 共同部屋型 | 1411 | 76 | 18.6 | 38 | 10.8 | 2 | 408.7 | 5.4 | 2.7 | 8.1 | 195.0 | 13.8% | |
| i寮 | 共同部屋型 | 13409 | 442 | 30.3 | 171 | 24.8 | 2～3 | 4266.6 | 9.7 | 6.6 | 16.3 | 2048.0 | 15.3% | もともとは4人部屋。現在、2～3人部屋として使用。収容人数は3名100室、2名71室として算出(仮定) |
| j寮 | 共同部屋型 | 2343 | 136 | 17.2 | 45 | 20.6 | 3 | 858.6 | 6.3 | 1.8 | 8.1 | 320.34 | 13.7% | 1室のみ個室 |
| k寮 | 共同部屋型 | 2744 | 240 | 11.4 | 59 | 20.7 | 4 | 1218.4 | 5.1 | 1.7 | 6.8 | 350.45 | 12.8% | |

*主な寮室の面積の項目：複数の種類、大きさの異なる寮室がある場合、主たる寮室の面積を記した。

Table 2 分析対象の寮の寮室と共用空間の面積データ

| 寮名 | 寮室のタイプ | 全寮室と共有空間の合計面積(S) ㎡ | 全寮室の合計面積 ㎡ | (S)における全寮室面積の割合 | 機能を限定した共用空間の面積 ㎡ | (S)における機能を限定した共用空間の割合 | 機能を限定しない共用空間の面積 ㎡ | (S)における機能を限定しない共用空間の割合 |
|------|---------|-----------------------|---------------|-----------------|---------------------|-----------------------|----------------------|------------------------|
| SCC | ルームシェア型 | 1041.0 | 382.4 | 37% | 297.3 | 29% | 361.4 | 35% |
| 小石川寮 | 個室型 | 1044.0 | 764.0 | 73% | 124.0 | 12% | 156.0 | 15% |
| 大山寮 | 個室型 | 6703.5 | 4942.0 | 74% | 845.0 | 13% | 916.5 | 14% |
| a寮 | 個室型 | 1267.1 | 1008.0 | 80% | 106.8 | 8% | 152.3 | 12% |
| b寮 | 個室型 | 1159.0 | 701.6 | 61% | 208.4 | 18% | 249.0 | 21% |
| c寮 | 個室型 | 988.5 | 613.8 | 62% | 171.6 | 17% | 203.1 | 21% |
| d寮 | 個室型 | 1296.5 | 763.0 | 59% | 237.9 | 18% | 295.6 | 23% |
| e寮 | 複合型 | 950.2 | 612.0 | 64% | 166.4 | 18% | 171.8 | 18% |
| f寮 | 共同部屋型 | 3129.8 | 2250.0 | 72% | 543.8 | 17% | 336.0 | 11% |
| g寮 | 共同部屋型 | 1040.3 | 697.2 | 67% | 160.1 | 15% | 183.0 | 18% |
| h寮 | 共同部屋型 | 614.9 | 408.7 | 66% | 99.8 | 16% | 106.4 | 17% |
| i寮 | 共同部屋型 | 7438.5 | 4266.6 | 57% | 1508.7 | 20% | 1663.2 | 22% |
| j寮 | 共同部屋型 | 1188.9 | 858.6 | 72% | 156.0 | 13% | 174.3 | 15% |
| k寮 | 共同部屋型 | 1628.2 | 1218.4 | 75% | 199.8 | 12% | 210.0 | 13% |

ウンジなど、他の寮とくらべても共用空間が充実していることがよく現れている。

SCC の特徴をより正確に評価するために、共有空間の使用人数を考慮した面積指標を提案し、その指標を用いて、寮の比較をおこなうこととする。

寮室と共有空間の面積指標

寮室の面積、および寮室の1人あたり面積(A)は、Table 1 のなかを示してある⁵⁾。分析事例が少ないことや、寮の計画意図がそれぞれ異なることのため、個室型寮、共同部屋型寮、ルームシェア型寮という分類だけでは、寮室の1人あたり面積(A)の傾向を十分に捉えきれない。たとえば個室型寮においても浴室、トイレ、キッチンが個室外の共用となっている寮が多数を占める一方、個室内に浴室トイレのついたa寮があり、個室型における寮室面積も約7㎡～14㎡とばらつきがある。SCC計画の際、個人の寮室が7㎡程度であることに小さすぎるとの懸念が多数出されたが、他の寮と比べても小さすぎるとは言えない。Aの値だけでの評価は十分ではない。他の面積指標を用い、Aの値との関係性をみることで、それぞれの寮の特徴をより正確に評価すべきであろう。

そこで、使用する人が限定された共用空間を評価するため、共有空間の1人あたり面積(B)の値を求めた。Bは、共有空間の利用者1人あたり面積の合計で示される値である。5人で使用する場所であればその面積の1/5を、また50人で使用する場所であればその面積の1/50を1人あたり面積として加算しその合計がBである。AとBの値の和がその寮における「1人あたりの占有面積」と言い換えられる。個人の使用可能面積(C)は、寮室の面積に加え、1人の寮生が自由に使用することのできる部分の面積を示す。SCCを例にこれらの指標を算出すると

寮室(個室) 7.6㎡、

ハウス内共同スペース(5名で利用) 50.0㎡

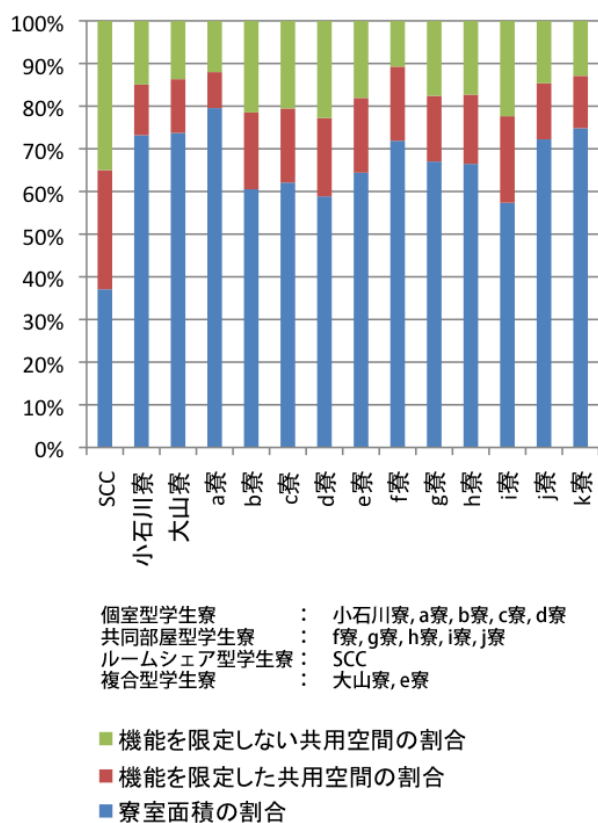


Figure 5 寮室と共用空間の面積割合

1 階共用ラウンジなど (50 名で使用) 160.2 m² であるから、

$$7.6 \div 1 = 7.6 \text{ m}^2 / \text{人} \quad (\text{A})$$

$$(50.0 \div 5) + (160.2 \div 50) = 13.2 \text{ m}^2 / \text{人} \quad (\text{B})$$

$$13.2 + 7.6 = 20.8 \text{ m}^2 / \text{人} \quad (\text{A+B})$$

$$7.6 + 50.0 + 160.2 = 217.8 \text{ m}^2 \quad (\text{C})$$

となる。概して C の値は、延床面積が大きくなればなるほど大きくなる。したがって、C の値を延床面積で割った値を使用可能面積率 (D) とする。D は、ある 1 人の寮生が、通常の生活の中で自由に使用できる部分 (C の面積) の、全体 (延床面積) に対する割合である。同様に SCC の場合で算出すると

$$217.8 \div 1261 \times 100 = 17.3\% \quad (\text{D})$$

である。これらの値¹⁶を用いて、以下、それぞれの寮を比較する。

Table 1 には、各寮の「寮室の 1 人あたりの面積 (A)」、「共有空間の 1 人あたりの面積 (B)」、および両者を足した面積「1 人あたりの占有面積 (A+B)」も記載している。SCC において、寮室の 1 人あたり面積 (A) は決して大きくない (Figure 6 の横軸の値)。しかし共有空間の 1 人あたりの面積 (B) をくわえた 1 人あたりの占有面積 (A+B) で比較すると、d 寮 (24 m²) に次ぐ大きさ (20.8 m²) となる。g 寮、h 寮、j 寮、k 寮といった共同部屋型寮は、寮室の 1 人あたり面積 (A) も、1 人あたりの占有面積 (A+B) も小さい。共同部屋型寮は概して 1 人あたりの占有面積 (A+B) を小さくすることで多人数への支援が可能となっている。A+B の値が大きいと、ある寮生 1 名にとって生活空間は広く快適といえるが、一方で収容人数は少なくなり、寮サービスを受けることのできる学生が少なくなる。寮室の大きさとともに、共有空間の 1 人あたり面積も、寮の特徴を表す指標として重要といえる。

そこで次に、「寮室の 1 人あたり面積 (A)」を横軸、「共有空間の 1 人あたり面積 (B)」を縦軸、として両者の関係を検討する。各寮の値をプロットしたものが Figure 6 である。横軸が大きくなるほど寮室が広く、縦軸が大きくなるほど寮内の共有空間が充実している。一人ひとりの生活の質のみを問題とした場合、縦軸横軸ともに大きくする、つまり寮室を広くし共有空間も充実させるほうがそうでないものよりも良いのは当然である。しかし同時に、限られた面積や予算との兼ね合いを考えると、個人の占有空間の広さは、収容人数とトレードオフの関係となる。したがって Figure 6 のグラフ上でいえば、右上ほど少人数へ

のサービスを充実させた寮、左下ほど多人数へのサービスを考慮した寮といえる。

ルームシェア型寮の SCC、トイレが個室に設けられた大山寮、浴室とトイレが個室に設けられた a 寮を除けば、Figure 6 の両項目には高い相関を見ることができる。概していえば、寮室の広さが広がるほど、共有空間の 1 人あたりの面積も大きい。高い相関が現れるのは、これまで建設されてきた大学学生寮が、ほぼ、類似した面積配分で計画されたことを示している。この関係から大きく左上にずれた SCC は、共有空間を重視した寮、右下にずれた大山寮、a 寮は個々の寮室を重視した寮と位置づけられる。一般に寮の計画にあたっては、寮室の大きさ、収容人数が基本的な設定条件として議論される。他大学の既存事例に倣った一般的な寮を建設するのならともかく、ある計画意図 (コンセプト) を明確に定め、それに基づいた寮の建物を計画する場合は、寮室の大きさのみを基準とするのは不十分である。共有空間の使われ方や共有空間の広さも重要項目として計画当初から検討すべきである。共有空間と寮室の面積を同時に検討し、Figure 6 上に寮を位置づけることで、その寮が、少人数への手厚い支援をめざすものなのか、より多くの学生への支援をめざすものなのか、さらには、共有空間を重視した寮か、寮室空間を重視した寮かという寮の特徴が明らかになる。

使用可能面積率 (D) の比較

Figure 6 に明示したように、SCC は、各寮室の面積を小さく設定しつつ、共有空間を充実させた寮であ

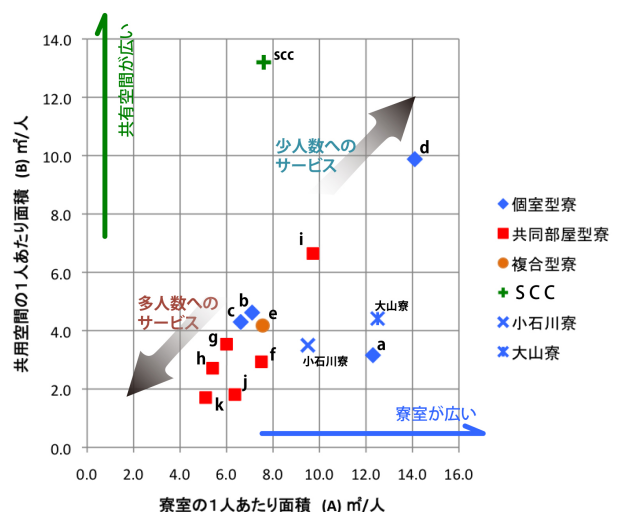


Figure 6 寮室 1 人あたり面積と共有空間の 1 人あたり面積の関係

る。使用する人数によって大小の共有空間があり、その大きさや設備が異なる計画としている。使用をハウスメンバーに限定し、半プライベートともいえる5名の共有空間のハウスリビングは、共有空間の1人あたり面積 (B) を増やすが、一方で、ハウスメンバー以外の学生は自由に利用することができない。プライベート、半プライベートの空間が増えれば増えるほどに、メンバー以外の寮生にとってみればその空間に入ることができず、寮内で使用できない部分が増えることになる。果たしてSCCでは、ある1人の寮生は寮のどれくらいの部分を自由に使えるのであろうか。

使用可能面積率 (D) を比較したものがFigure 7である。全ての寮の中で、c寮が最も大きい値を示し、SCCはそれについて大きい。Dの値が大きいことは、寮のより多くの場所を自由に使える、すなわち寮生個人からみて、寮の多くの部分を利用することができることを示している。寮の多くの部分を使用できることは、同時に、他の寮生との接触が増えると期待される。

一方で、小石川寮が最も低い値となった。小石川寮は、ほとんどがプライベートな空間であり、共有空間であるキッチン、風呂、トイレ等も比較的小さな部分を多くの学生で共有している。小石川寮の寮生が寮内で自由に使用できる場所は10%以下であり⁷⁾、SCCでの17%以上の空間を学生が自由に使えることと比較すれば、他の寮生との交流の場は限定されている。SCCが学部1、2年生を対象とした寮であるのに対し、小石川寮は大学院生を対象とした寮であり、独立した環境で研究に集中したい学生の利用を念頭においている。寮生間の交流の意味は両者で異なる。寮の性格付けの相違が面積構成にもはっきりと現れているといえる。

まとめ

本論では、東京都内の女子大学における大学学生寮14例を対象とし、平面図に基づいてその諸室の面積構成を検討した。特に、寮室の種類（個室型寮、共同部屋型寮、ルームシェア寮型）による分類、ならびに寮室と共有空間の面積についての比較をおこなった。それにともない、お茶の水女子大学の新寮「お茶大SCC」における寮室、共有空間の計画の特徴を明らかにした。寮室と共有空間の面積構成から、お茶大SCCは他の寮と比べても非常に大きな割合の共有空間が設けられていることが明らかになった。

さらに、「寮室の1人あたりの面積 (A)」と「共有

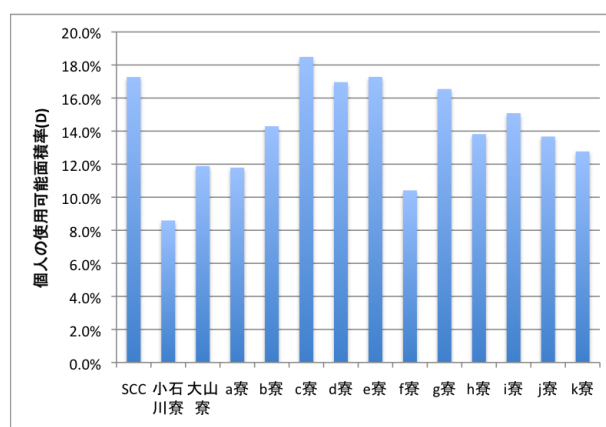


Figure 7 各寮における個人の使用可能面積率 (D)

空間の1人あたりの面積 (B)」の関係から、各寮の特徴を位置づけた。すなわち寮室を充実させる寮 (大山寮、a寮)、共有空間を充実させる寮 (SCC) である。寮室と共有空間の1人あたりの面積の相関を表した図において、両項目を共に大きくすると「少人数への充実した支援」をおこなう寮となり、両項目を小さくすると「手厚くはないが多人数への支援」を目指す寮となる。こうした寮の特徴を、相関図上で示すことができた。

また、1人の寮生が、通常の生活の中で自由に使用できる部分の、全体に対する割合を示す「使用可能面積率 (D)」を設定し、各寮での値を比較した。14例のうちc寮、d寮、SCCが高い値となったが、これは、寮生個人の視点から寮が有効に利用されていることを示している。これは同時に、他の寮生との接触する場所が増え、ひいては交流の機会も増加すると予想される。

SCCは、「共にすまい共に成長する」という、人と人のつながりを重視して計画された寮である。同時に、個人のプライベートな空間も確保されるよう、小さいながら個室型の寮室も設置された。こうしたコンセプトを、具体化したSCCの建築計画を、東京の女子大学の他の類似例と比較することで、SCCが、共有空間が充実し、1人の寮生が自由に使用できる部分が多い寮であることが確認された。学生どうしが接触する場所が増え、交流が促進されることが期待される。

本研究は、建築の平面図をもとに、面積構成の比較による分析であった。共有空間の割合が多い、寮生が利用できる場所の割合が大きい、といった建築的しつらえが、実際のところ寮生の満足度につながっているかどうか、共有空間が増えることが連帯感の向上や交流の活発化にどのように関連しているのかという点に

については、まだ明らかにされていない。実際の生活については、建築の面積のみでは分からない部分が多い。今後は、SCC で生活する寮生への質問紙調査や行動調査によって、共用空間の使用状況を明らかにし、学生寮の共用空間のありかたについての検討を深めていく予定である。

注

*1 耳塚寛明 (2011) が指摘するように、かつては国立大学の学生寮と言えば相部屋であり、住環境としても劣悪なイメージがつきまとっていた。文部省が学寮政策を「個室主義」へと転換したことにより現在建設される寮は、バス・トイレを備えた個室学生寮が一般的であるとする。昭和 37 年に学徒厚生審議会より出された答申では、寮の「教育的役割」に関して、「学寮はその経済的側面ばかりでなく、共同生活を通して学生の人間形成を行う場としての教育的役割を十分認識しなければならない」と記載されているが、実際のところ、学生運動以降重視されたのは、寮室の個室化であり、また大学による寮の運営管理であった。例えば、東北大学有朋寮の立て替えに際してだされた東北大学『学生協だより (17)』(2001) では、以下のような記載がなされている。

「文部科学省 (当時は文部省) は昭和 55 年「国立大学における厚生補導施設の改善充実について」という報告書を受けて新寮建設等のための基準を明確にしました。それがいわゆる「新寮建設 4 条件」です。その内容は 1. 管理運営規程の制定、2. 負担区分の明確化 (私生活費の自己負担)、3. 居室の個室化、4. 食堂の不設置、の 4 つで、これ以降に建設された全ての国立大学の学生寮にこの 4 条件が適用されています。(中略) 個室は多くの学生が希望しています。(中略) 学寮においてまず満足されているべき重要な条件のひとつが、寮生が勉学に集中できるような良好な空間の提供であるはずで、従って、生活のリズムや学習の時間帯の相違からくるストレスを回避できる「居室の個室化」が望ましいのは言うまでもないと考えられます。また先に述べた昭和 55 年作成の報告書の中でも、入寮希望者の 85% がすでに個室への居住を希望しているという数字が挙げられています。」

文部省『「我が国の文教施策」(平成 2 年度) 新しい高等教育の構築を目指して』(1990) の「学生生活」の節の中では、昭和 63 年度の「学生生活調査」によるデータとして、全学生の約 6% の者が学生寄宿舎に入居していることを挙げ、同時に個室傾向を指摘する。「最近の学生の志向に合わせ、国立大学の場合、近年

設置される学生寄宿舎 (新規格寮) は個室となっており、かつての二人部屋や四人部屋のものは、次第に減少している。このため、昭和 55 年度における個室の学生寄宿舎 (新規格寮) 入居者数は 8,002 人であったが、63 年度には 1 万 4,495 人となっている (複数人数部屋については、2 万 1,091 人から、1 万 6,862 人に減少)。また、最近の留学生の増加に伴い、既設の学生寄宿舎に留学生が入居することや、当初から留学生を入居させることを前提に建設されることも多くなっている」

*2 寮の建築設計上の留意点については、建築新潮研究所編 (1992) pp.18-19 を参照のこと。また、有嶋清之ら (2005) は、学生寮の共有空間について、利用実態をアンケートによって調査し、寮生の生活における共有空間での活動の意義を考察しているが、共有空間の具体的な広さやデザインについては調査されていない。鈴木在乃 (2010) は、特に、大学における留学生宿舎の現状を調査している。寮生の連帯感を高めるため、相部屋や共同利用施設を増やしたり、教育プログラムの参加を義務づけたりしている現状を述べる。共同生活による留学生と日本人学生の交流によって、異文化理解教育に資する住環境を整備することの重要性を説いている。これらの先行研究に見られるように、一般的に寮における共有空間の重要性や共同生活の意義は既に指摘されている。そこで本論は、一般的な学生寮に関する指摘にとどまらず、寮の計画意図 (コンセプト) の相違を考慮したうえで、共有空間の面積割合について分析考察をおこなうこととする。

*3 調査をおこなった大学名については、安全管理上の問題より寮が特定されないよう、記載しない。お茶の水女子大学以外の学生寮については寮の名称を、a ~ k の記号を用いて表記している。

*4 機能が限定された共有空間とは、キッチン、食堂、風呂、トイレ等、使用目的が明確な諸室であり、機能を限定しない共有空間とは、ラウンジや談話室とする。廊下、階段、玄関、下足室、管理人室、倉庫、設備室は共有空間に含めず、面積外とした。一般に共同住宅では、中廊下型や片廊下型、階段室型などの建築計画上の形式があり、形式によって、グロス (総面積) とネット (諸室に使用する面積) の割合が大きく変わる。本論では、こうした建築計画上の形式による割合の相違を排除し、共有空間と寮室の面積比を比較することが目的であるので、純粋に寮生が日常的に使用する空間に限って面積を算出している。

*5 ひとつの寮のなかに、異なる大きさの寮室が存在することが少なくない。寮室の 1 人あたりの面積は、ある特定の人、ある特定の寮室に注目した場合、その寮室ごとに A の値が設定される。寮全体に注目した場合は、

寮室全体の面積を収容人数で割った値（平均値）を A とする。本論では、寮ごとに比較をおこなうため、寮室全体の面積を収容人数で割った平均値を A として分析した。

(6) A、B、C、D の値は、基本的に、ある特定の寮生についての値となる。すなわち、生活者個人の立場からの指標である。使用する寮室の大きさが異なったり、共用スペースを使用する人数が異なったりすれば、同じ寮を使用していたとしても異なる値となりうる。ただし、本論では、先の注でも述べたように、寮ごとの比較をするため、A 平均値を用い、使用できる共用スペースも、一般的な学生の例で算出した。

*7 本論での小石川寮の各指標の値は、小石川寮が単体で運用されていたときのものの値を用いている。現在、SCC の完成後においては、小石川寮と SCC は一体的に運用されており、SCC の共用ラウンジは小石川寮の学生も使用が可能である。共用空間の面積に関わる値は、多少大きくなる。

参考文献

赤坂瑠以（2010）「アメリカの大学の学生寮視察調査：本学の学生寮への提案」『高等教育と学生支援—お茶の水女子大学教育機構紀要—』1: 49-55, 2010. (URL <http://hdl.handle.net/10083/50680>)

有嶋清之、大原一興、小滝一正、藤岡康寛（2005）『学生寮における共有空間の役割と使われ方に関する研究』日本建築学会大会学術講演梗概集，E-2, 2005, pp.131-132.

建築新潮研究所編（1992）『建築設計資料 37 社宅・寮～企業の家族寮・独身寮』，東京，建築資料研究社．

鈴木在乃（2010）『日本の大学における留学生宿舎提供の現状と課題』日本建築学会大会学術講演梗概集，E-2, 2010, pp.1521-1522.

東北大学『学生協だより（17）』（2001）．(URL http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199001/hpad199001_2_032.html)

耳塚寛明（2011）「お茶の水女子大学 2 つのコモンズ - 「共にあること」を理念とした教育施設 - （下）：新しい学生寮「共に住まい共に成長する」お茶大 SCC」『文部科学教育通信』278, pp.10-11, 2011. (URL <http://hdl.handle.net/10083/50934>)

文部省（1990）『「我が国の文教施策」（平成 2 年度）新しい高等教育の構築を目指して』．

2012 年 3 月 10 日 受稿

2012 年 3 月 28 日 受理